

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

白 楊

論 文 題 目

近代日本語における「欧文脈」の成立
——中国語との対照を視野に入れて

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 齋藤 文俊

委員 名古屋大学教授 飯田 祐子

委員 名古屋大学教授 釘貫 亨

委員 名古屋大学准教授 宮地 朝子

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、幕末・明治期において、西洋語の翻訳によって生じた語の成立および定着過程を明らかにするとともに、欧文直訳的表現である「欧文脈」について考察したものである。

研究背景、研究目的、研究方法についてまとめた序章に続き、第一章では、近代日本における翻訳語についての先行研究を整理するとともに、日本における「欧文脈」研究と中国における「欧化語法現象」研究とを対照させ、本論文でとりあげる対象語を特定し、日中対照研究の可能性について論じている。

第二章および第三章では、それぞれ、第三人称代名詞「he」「she」の訳語として用いられた「彼」「彼女」について、江戸時代以前の用例を調査した上で、江戸時代の蘭学資料、明治期の対訳辞書・国語辞書、そして明治・大正期の新聞、さらには雑誌の中から用例を採集し、それぞれの人称代名詞としての定着時期を特定している。その際、単なる語史の面からの考察にとどまらず、指示詞機能の衰弱と代名詞機能の発達、指示対象などについても言及するとともに、「彼女」については、中国語の第三人称代名詞「她」との対照を行っている。

第四章・第五章は「self/-self」の訳語としての「自身」「自己」についてとりあげる。現在、「自身」「自己」が複合語として用いられる場合は、「自身」は「私自身」「自分自身」のように後接して接尾語的に用いられるのに対し、「自己」は「自己犠牲」「自己批判」のように、主として漢語の前に用いられている。本論文の調査により、明治期までの対訳辞書では「-self」の訳語として、「自身」ではなく、「汝自己」などの「～自己」が使用されており、その理由が英華字典の影響であることが明らかになった。さらに、「～自身」が対訳辞書で定着するようになるのは大正以降になること、国語辞書に接尾語的な「自身」が出現するのは、さらに遅れて昭和に入ってからであることを指摘している。一方、対訳辞書で「-self」の訳語として用いられていた「～自己」は、新聞などではその用例は見られず、明治30年代以降、「自己〇〇」のような複合語として使用され定着するようになるということを明らかにしている。

第六章は、不定を表す連体詞「一」についての考察である。「一婦人」などの用法は、幕末・明治期に入って西洋語の「a/one」の翻訳の影響により、明治初期の漢文訓読（直訳）体の文章で多用されていることを論じる。第七章では、前章を承け、「一個・一個人・個人」を中心に、「個人」という語が成立するまでの過程を考察し、さらに1900年代の中国での「個人」の使用状況を「申報データベース」を用いて調査して、両者の関係について言及している。第八章は、「part」「a part of」の翻訳を中心に、「一部・一部分・部分」の成立についての考察である。「部分」については、明治初期、西周によって多く使用されるようになったと指摘する。終章では、本論文のまとめと、今後の課題について述べる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

従来、幕末・明治期において、西洋語が日本語に与えた影響については、「新漢語」など語彙の面、また個々の語の史的変遷の面から論じられることが多く、翻訳によって生じた語法が近代日本語に与えた影響に関する研究はこれまであまり行われていなかった。本論文は、「欧文脈」という、翻訳によって生じた日本語をとりあげ、各語の史的変遷のみならず、語法についても論じている点がまず評価できる。第二章・第三章でとりあげた第三人称代名詞「彼」「彼女」についても、語史の面からはこれまでも多くの研究がなされているが、本論文において、その指示詞機能の衰弱と代名詞機能の発達などの過程が明らかになったことは大きな成果といえる。

また、多種多様の資料を用いて着実な用例調査を行っている点も高く評価できる。第二章から第八章においてとりあげた各語につき、江戸時代の蘭学資料、明治以降の対訳辞書・国語辞書、そして明治・大正期の新聞、さらには雑誌を中心に用例を採集し、必要に応じて、江戸時代以前の用例も検討した上で、各語の成立および定着過程を明らかにしていった点、そしてそこから導き出された結論には説得力がある。

さらに、西洋語からの翻訳によって生じた語法を、日本語だけではなく、中国語においても検証し、日中対照研究への可能性を開いたという点も本論文の大きな成果である。これまで、翻訳語の日中間の交流については、語彙・語史の分野から多くの研究が行われてきた。本論文では、中国における「欧化語法現象」という点に着目し、その研究成果の中でとりあげられてきた語法を整理した上で、日中の翻訳語法に共通する問題として、「代名詞」（第三人称代名詞および不定代名詞など）を研究対象とすることにより、対照研究としての成果を示すことができた。

本論文でとりあげた「彼」「彼女」「自己」「個人」などは、近代文学においても多く使用されている語であり、その点、本論文の成果が、言語研究のみにとどまらず、近代日本文学、さらには日本文化研究分野にも寄与するものとなっている。

ただ、課題とすべき点も見られた。まず、資料の面で、文学作品の用例調査が、翻訳小説、また明治・大正期の新聞・雑誌に掲載された一部の小説のみを対象としている点が惜しまれる。文学作品が当時の日本語に与えた影響という点を考慮すると、さらに対象範囲を広げて調査することで、より大きな成果を得ることができたはずである。中国語における「欧化語法現象」との影響関係についても、本論文では、代名詞を中心とする一部の語のみにとどまっており、今後さらなる調査考察が必要である。また、語法の研究という点では、統語構造にまで踏み込んだ研究も望まれる。しかし、これらは今後の研究の進展によって補うことが十分可能なものであり、発展的課題の提起を果たしたという点でも、本論文の基本的な価値が損なわれるものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。